

〔論 説〕

巴金と読者

——公開書簡集『短簡』と『随想録』を題材に——

河 村 昌 子

はじめに

1930年代にすでに作家として名を成していた巴金（1904-2005, Ba Jin）は、日中戦争終結後、中国大陸に留まり、晩年は作家協会主席の地位にあった。中国文壇の老作家としての巴金は、例えば「文革記念館」の設立を呼びかけるなど、現代中国が倫理的に向かうべき方向を示す発言を行い、影響力を発揮した。

巴金が共産党政権下の中国で、独特の発言力を保持し続けえた背景のひとつに、彼が中国政府から給与を受け取らず、自分の作品の印税で生活していたという事実がある。つまり巴金は、政府が定める就労大系とは別に、読書市場に身を置くことで、知識人としての独立性を保っていたと考えられる。

巴金は、印税に依拠する立場にあって、当初から読者を重視し、自分の作品の読者に対して深い思い入れと真摯な覚悟をもって臨んでいた。

本稿では、巴金が1930年代なかばに読者との間で交わした書簡を編纂した、公開書簡集『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）と、全5巻の随筆集『随想録』（香港三聯書店、1979年～1986年）に含まれ、読者に言及している二篇の文章「把心交給読者（読者に心を捧げる）」⁽¹⁾「我和読者（私と読者）」⁽²⁾を題材にして、巴金の読者観の初歩的な確認を行いたい。また、1930年代半ばの文壇と読者の有り様を示す一事例として、これらの書籍、文章に描かれている巴金と読者の交流をスケッチする。さらに、巴金の文章から窺える読者の実際の姿を抽出して、1930年代の読者像の一端を示したい⁽³⁾。

(1) 「把心交給読者」：香港『大公報』副刊「大公園」1979年3月6、7日初出、『随想録』（香港三聯書店、1979年）所収、『巴金全集』第16巻（人民文学出版社、1991年）所収。

(2) 「我和読者」：香港『大公報』副刊「大公園」1981年3月5日初出、『真話集』（香港三聯書店、1982年）所収、『巴金全集』第16巻（人民文学出版社、1991年）所収。

(3) 巴金の『短簡』を論じた先行研究としては、李存光『巴金伝』（北京十月文芸出版社、1994年）、陳思和『人格的發展 巴金伝』（上海人民出版社、1992年）がある。李存光『巴金伝』は『短簡』所収の主要な文章と関連する事実や資料を紹介して、「読者を熱愛し、読者に関心を寄せ、心を開いて読者と交流することは、巴金が文学の道に足を踏み入れて以降、一生を貫く最も顕著な特徴のひとつとなった。」と概括している。李氏の概括は巴金の伝記的評価として極めて正確で、十全である。本稿は李氏のこの見解を踏襲している。陳思和『人格的發展 巴金伝』は、1930年代前半の中国アナキズムの退潮を重視する巴金伝であり、『短簡』から、運動に対する巴金の心境および姿勢の変化を読み取っている。傾聴すべき鋭い指摘だが、巴金と読者の諸相を確認しようとする本稿の方向性とは異なり、参照するに留めた。

1. 巴金の「読者」観

『随想録』所収の随筆「把心交給読者」は、巴金が自分と読者の関係をもっとも明快に語った文章である。

私は確かに読者の期待を自分への鞭にしてきた。自分が生活している社会に微力を尽くしたい、同時代の人に友好の情を表したい、一人の中国人として果たすべき責任を果たしたいと思っていなければ、書く必要などない。だが、願望、認識、実践、効果はそれぞれ別もので、私が一人で話して終わり、とはゆかない。読者を離れては、私は何もできない。正しく書けたか、書き誤ったか、私の作品は読者の願望に合っているか、私たちの社会の進歩に貢献できているか、知りようがない。読者だけが発言権を持っている。私も彼らの意見を尊重しなければならない。もし私の作品が読者に害をなしたら、読者は私の作品をゴミ箱に投げ捨てるだろうし、私も執筆をやめるほかない。だから言っておきたい。読者がいなければ、今日の私はありえなかったと。また、読者の手紙こそが私の養分だとも。もちろん私が言っているのは、個々の読者ではなく、読者の大多数である。読者の一言一句に従うとか、全ての手紙に返事をするという意味でもない。ただ、私はいつも、読者の手紙に基づいて自分の創作の効果を点検し、自分の作品の影響を確かめている、と言いたいのだ。⁽⁴⁾

この文章は、読者から創作の秘訣を尋ねられた巴金が、秘訣のようなものがあるとすれば、それは「読者に心を捧げる」ことだけだ、と述べたものである。

ここで巴金が想定している読者とは、書き手が主体なく盲目的に従う存在ではない。まず前提として、巴金には、社会に貢献し、人々への愛を表明したいという明確な目的意識、信念がある。読者の意見は、その上で、犯しがたい価値をもつものとされる。読者は巴金にとって、自分の創作を点検し改善するための指針なのである。

巴金は、読者の声に真摯に耳を傾けること、信念に従って主体的に創作すること、双方に、等価な、欠くべからざる意義を認めている。つまり巴金は創作を、両者を結びつけて作品を磨き上げてゆく行為と見なしていると解せよう。

文化大革命中、巴金の著作集『巴金文集』全14巻（人民文学出版社、1958年～1962年）は、「毒草」との烙印を押され、全面否定された。巴金は創作の自由を失い、イデオロギーによる管理を受けた。『随想録』は巴金の文革体験を下敷きにした文革批判の書であり、上述のような読者観には、もちろん、文革中に被った拘束に対する、痛みを伴った批判が含まれているはずである。

しかし、過度に文革の文脈を重視することはできない。なぜなら、次に述べるように、巴金は1930年代にすでに、読者への強い思い入れを露わにし、読者と交流もしていた。巴金が文革後に語った読者観は、30年代の実績の延長線上にある。むしろその実績が豊かであったればこそ、文革後に、自らの作家生命を託すかのように読者を想起するにいたった、

(4) 前掲「把心交給読者」。

と見る方が自然だろう。

2. 公開書簡集『短簡』

巴金の作品は、封建的旧家庭を出て社会へと飛び立つ少年を描いた小説『家』（開明書店、1933年）⁽⁵⁾に代表されるように、青少年を革命へと導くメッセージに富んでおり、若い読者に大きな影響を与えた。読者からの来信も多かったらしく、巴金は、主に書信を通して、あるいは直接の交流によって、読者と結びつき、読者に囲まれていた。公開書簡集『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）は、1935年から1937年に『中流』等の雑誌や新聞に掲載された読者との間の書簡を中心に、巴金が読者宛に書いた書簡体の文章を編纂したもので、巴金と読者の交流の様子を伝えている。

巴金は、『短簡』について、次のように語っている。

私は1935年8月に日本から戻り、上海で、文化生活出版社のために数種類の叢書を編集した。これ以降、読者からの来信はまた多くなった。この二三年の間、私はほとんど全ての手紙に返事をした。数人の読者はずっと私と連絡を保ち、長年の友となった。私の妻も、早期の読者の一人である。彼女は私の小説を読んで私に興味を持ち、私は彼女に何度か会ううち、彼女に情を感じるようになった。私たちは知りあって何年もしてから結婚した。一生のうちで喧嘩をしたことは一度もない。私は1936年、37年に、公開の読者宛て返信を少なからず書いたが、そのうち一通は彼女に宛てたものである。これらの手紙は後に、『短簡』という小冊にまとまった⁽⁶⁾。

この証言から、1930年代なかばの数年間、巴金は読者からの来信に誠実に個別対応していたこと、また文通から親密な交際にいたる例が一定程度あり、巴金と生涯の伴侶の出会いもそこから生まれたことが知れる。巴金は当時30歳代前半で、青少年の読者よりやや年上の先輩格であり、彼らと同じ目線で語り合える年齢だったと言えるだろう。

『短簡』を通観すると、巴金宛ての来信で言及される主要なトピックのひとつに、年若い読者の人生相談、具体的には家出して革命運動に身を投じたいという相談があったことが分かる。巴金の初期の代表作である『家』が上海『時報』紙上に連載されたのは1931年4月から1932年5月のこと、1933年には単行本が開明書店から出版され、すでに反響を呼んでいた。また、1936年6月から12月まで『文季月刊』誌上では、『家』の続編『春』⁽⁷⁾の一部が連載されていた。

『家』や『春』は、封建的家制度に抵抗したり、あるいは封建家庭と訣別するまでの、少年たちの成長を描いた小説である。『家』の読者が、作者巴金に、上述のような人生相談を持ちかけるのは、生じるべくして生じた結果と言える。おそらく家出と革命運動に関

(5) 『家』：上海『時報』1931年4月18日～1932年5月22日（休載期間を含む）初出。『時報』連載当時の題名は『激流』。『巴金全集』第1巻（人民文学出版社、1986年）所収。

(6) 前掲「把心交給読者」。

(7) 『春』：第1章から第10章までが、『文季月刊』第1巻第1期から第6期、第2巻第1期（1936年6月～12月）に掲載された。開明書店1938年初版。『巴金全集』第2巻（人民文学出版社、1986年）所収。

する質問は、読者から巴金への来信の中で、大きな位置を占めていたのだろう。また、巴金がこれらの文章を、公開書簡という形式で、雑誌、単行本等の出版メディアを通して発表していることから、巴金自身このテーマを公共性の高い論点と見なしていたであろうことも、指摘しておきたい。

さて、青少年の読者から寄せられた家出と革命運動に関する質問に、巴金はどう答えたのか。『短簡』所収の「給一個孩子（ある子どもへ）」⁽⁸⁾で巴金は、友人の家出について相談してきた生徒に対し、家出をしようとしていた別のある少女の例を紹介して、以下のよ

うに述べている。

私は彼女（家出しようとしていたある少女を指す。手紙の宛先の人物とは異なる。：筆者注）に、今のところは忍耐するべきだと忠告しました。そうです、私は自分でも恐れているこの二文字の言葉を口にしました。私は自分の無力が恨めしいです。しかし、現実の環境を変えようと思ったら、一人の力は弱いものです。そのためには、集団の力に頼らなければなりません。私は「忍耐」が嫌いです。でも、時には人に忍耐を勧めざるを得ないのです。意図を誤解されがちですが、私は自分を信じています。私の言う忍耐は、長期の屈服ではありません。意図は「未来の勝利に対する準備」にあります。無益な犠牲は避けねばなりません。命と精力を取っておいて、より大きな事業に捧げるべきです。私たちには、社会、人類に有益なことをやろうという志があるのですから、はるかに長い未来の歳月に思いをいたさなければなりません。全ての希望を、一時的な情熱の衝動に委ねてしまっ

てはいけません。一つの計画を決定するには、冷静な頭脳が必要です⁽⁹⁾。

巴金は、革命に理想を求め家出を考えて彼に相談を持ちかけてきた青少年に、小説『家』の筋立てや『家』の登場人物に語らせた理想とは相違して、「忍耐」を勧め、短慮を戒めている。

この手紙からは、巴金が、自作で描いた理想的な理想の家出と、個別の読者の実際の家出計画のあいだに、はっきりと一線を画していることが読みとれる。巴金は、爽快な家出の物語を紡ぎ出した作家として、その作品世界と一致した言説を操るのではなく、個々の読者の実際問題である家出に、別の角度から切り込んでいる。ここで表出しているのは、フィクション化された家出と実際の家出行為との位相の違いである。

巴金の『家』は、多くの青少年読者を惹きつけ、影響を与えた。『家』を読んで革命を志し、家出を考える者が現れ、彼らの一部はその気持ちを直接巴金に投げかけてきた。巴金はそれを受けて、読者の訴えに積極的に介入し、小説とは別の位相で、自らの革命観を主張して返した。またこれを公開書簡としてメディアで流通させたのである。これら一連

(8) 「給一個孩子」：『中流』第1巻第10期1937年2月初出。『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）所収。『巴金全集』第13巻（人民文学出版社、1990年）所収。

(9) 前掲「給一個孩子」。訳文は『短簡』（良友図書印刷公司、1937年3月初版）に拠る。なお、『巴金全集』第13巻では、「私たちには、社会、人類に有益なことをやろうという志があるのですから（既然我們有志向要做一兩件有益於社會和人類的事情）」の部分が、「私たちには、社会、民族、人類に有益なことをやろうという志があるのですから（既然我們有志向要做一兩件有益于社会、民族和人類的事情）」となっている。

の動きを、若きオピニオンリーダーがオーディエンスに回路を開いて生まれた、初歩的な相互交流の姿と見ることもできよう。

3. 国防文学論戦に関連して

さて、巴金と読者が以上のような濃密な関係を形成していたとき、巴金は文壇内の論戦に巻き込まれていた。

周知のように、1936年の中国文壇は、国防文学論戦のただ中であつた。巴金は中国文芸家協会には参加せず、中国文芸工作者宣言に署名し、徐懋庸から名指しで卑劣なアナキストと批判された。これを受けて、病床にあつた魯迅が、馮雪峰の起草した文章に加筆修正を行い、「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題（徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線について）」として発表し、「巴金は熱情もあり、進歩思想を持った作家で、屈指の好作家に入る作家である」と巴金を擁護したことも、文学史上あまりにもよく知られた事実である⁽¹⁰⁾。

巴金が魯迅の援護に心から感激したであろうことは想像に難しくなく、巴金は終生魯迅に深い敬意を抱き続けた。また、魯迅の巴金評価は、その後長く巴金を守護した。

しかし一方で、魯迅と巴金のあいだには若干の違和がある。陳思和が明確に指摘しているように、魯迅は「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」でアナキズムに賛意を示しているわけではない⁽¹¹⁾。巴金は当時、中国アナキズム運動の退潮を受けて、重大な転換点に立っており、思想を変容させつつあつたものの、転向してはいなかつた。巴金は「答徐懋庸並談西班牙的聯合戦線（徐懋庸に答え、あわせてスペイン連合戦線を語る）」⁽¹²⁾を著して、C.N.T.がスペイン統一戦線で果たした役割を力説してアナキストを擁護し、徐懋庸に反論した⁽¹³⁾。

国防文学論戦における巴金の文学史的位置については、多くの先行研究が論及しているため、説明を省くが、ここでは『短簡』との関連で若干の補足をしておきたい。

『短簡』所収の「答一個北方青年朋友（ある北方青年の友人に答える）」⁽¹⁴⁾は、北方在住のある青年が、巴金は上海に移ってから無意味な論戦に巻き込まれがちで、大変心配していると手紙に書いてきたのを受け、巴金がこの論戦は無意味ではないと説明したものである。

現在『巴金全集』第13巻（人民文学出版社、1990年）に収められている同文と本稿の考察対象である『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）所収のものを付き合わせると、「答一個北方青年朋友」は、大幅な削除と末尾の加筆によって、面目を一新していることが分か

(10) 丸山昇「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」手稿の周辺——魯迅の晩年と馮雪峰をめぐる——」（丸山昇著『魯迅・文学・歴史』汲古書院、2004年、pp.178-210）が、「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」が発表されるまでの経緯をつまびらかにし、文学史的な評価を下している。

(11) 巴金と魯迅の関係については、前掲陳思和『人格的發展 巴金伝』pp.180-188が詳しく考証して論じている。

(12) 「答徐懋庸並談西班牙的聯合戦線」：『作家』第1巻第6期1936年9月15日初出。『巴金全集』第18巻（人民文学出版社、1993年）所収。

(13) 他に「一篇真実の小説」（『大公報・文芸』1936年9月23日初出、『巴金全集』第18巻所収）も徐懋庸に対するやりきれない思いとスペイン統一戦線への共感を語っている。

(14) 「答一個北方青年朋友」：『中流』第1巻第3期1936年10月5日初出。『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）所収。『巴金全集』第13巻所収。

る。今回、初出雑誌の『中流』第1巻第3期（1936年10月）、良友図書印刷公司1937年初版、文化生活出版社1949年版、『巴金文集』第11巻（人民文学出版社、1961年）、『巴金全集』第13巻（人民文学出版社、1990年）を確認したところ、時系列に沿って『巴金文集』まで、順次書き換えが行われていたことが判明した。『巴金全集』は基本的に『巴金文集』と同じであった⁽¹⁵⁾。

この文章の導入部は、巴金が直前に異国の言葉を操る兵士（即ち日本兵）の封鎖に遭遇した体験談で、続いて青年の手紙が引用紹介される。手紙には、アヘンを売る外国人の様子や復古的な教育の現状などに対する青年の嘆きが綴られており、巴金は共感を示す。それから、上述の青年の心配が示される。このあたり、『巴金全集』第13巻で言えばP.37下から4行目までは、末尾の「……」が、『中流』第1巻第3期、良友図書印刷公司1937年初版、文化生活出版社1949年版で「你以爲我在作家九月號上面寫的文章是無謂的筆戰麼？」となっていることを除いて、各版に細かい字句の異同以外書き換えはない。

大きな違いが見られるのはこの後段である。良友図書印刷公司1937年初版に基づいて話を進めると、ここより約8頁にわたって徐懋庸の問題が取りあげられている。一方『巴金全集』版では、当該部分がほぼ冒頭のみで圧縮された結果、論戦の一般的な意義を説いた小段に書き換えられた格好になっている。文化生活出版社1949年版は、良友図書印刷公司1937年初版の8頁相当の記述を約1頁に圧縮しているが、『巴金全集』版とは異なり、スペイン統一戦線への言及を含むことから、次に詳述する良友図書印刷公司1937年初版の趣旨を、ある程度残したものと言える⁽¹⁶⁾。

以下、良友図書印刷公司1937年初版の徐懋庸に関する記述を確認してゆくと、巴金はまず、「答徐懋庸並談西班牙的聯合戦線」を書いたのは、「単にスペイン人民解放戦争で犠牲になった英雄たちの弁護をし、黙々と働いている少数の「中国アナキスト」の免罪を晴らしたかったから」で、論戦の文章ではなく、事実を正したのみだと述べる。また、徐懋庸が、「もともと「文芸家協会」の最初の発起には、黄源が入っていたのです。私は自分の耳で、彼が傅東華と沈起予から発起人名簿を受け取ったこと、そこには二、三十人の姓名と、交渉すべき人の名がたくさんあったということを知りました。いくら経たないうちに、どういうわけか、文協発起人の名簿を手にした者が、文協の積極的破壊者に変わり果てたのです。（後から聞いた話では、これは彼と巴金が相談した結果なのだそうです。ですから私は巴金のことも訳がわかりません。）」と黄源と巴金を非難した徐懋庸の文章を引用し、次のように反論を展開している。

たしかに私は文協に加入しませんでした。また文芸工作者宣言には署名しました。

(15) 各種版本のうち良友復興公司1943年版は未見。

(16) 唐金海、張曉雲主編『巴金年譜』（四川文芸出版社、1989年）P.434は、初出雑誌『中流』と『巴金文集』第11巻（人民文学出版社、1961年）を比較し、「答一個北方青年朋友」に削除、改編があることを指摘して、徐懋庸等が巴金を批判した一連の文章の書誌情報も丹念に跡づけている。しかし「按ずるに、『短簡』に収めた際に修訂して「文芸家協会」不参加の経緯と最後の一段を削除した。」としているのは正しくなく、若干文章が削除されているものの、良友図書印刷公司1937年初版は『中流』第1巻第3期にかなり近い。

なお、この書き換えは当時の巴金の思想を知る上で重要な情報を含んでおり、また国防文学論戦の資料としても価値がある。『中流』第1巻第3期、良友図書印刷公司1937年初版、文化生活出版社1949年版は必ずしも容易に目撃できないので、異動の詳細を原文に照らして末尾で紹介したい。

ですが、加入しないからといって、文協に反対しているとは限りません。その時加入しないから永久に加入しないと言うことでもないでしょう。またいわゆる「文芸工作者」は何ら新団体を組織していませんし、文協に対抗もしていません。私にしても、たくさんの署名者のうちの一人にすぎません。宣言を起草したわけでもありません。一枚の宣言に署名して、祖国を滅亡から救い、存続させようという態度を示す、こんな最小限の自由さえ剥奪されてしまったのでしょうか？徐懋庸は、私が文協に「反対」していると、一言で切り捨てました。他にどんな証拠があるのか知りません。「聞いた話では、これ（黄源が文協に反対していることを指す）は彼（黄源）と巴金が相談した結果なのだそうです。」に至っては、なおのこと「あてにならないいわさ」です。一人の人間を攻撃し、罪名を着せるのに、「聞いた話」だけで済ませることはできないように思います。それが可能なら、私の「聞いた話」も多いです。

真実はこうです。黄源はたしかに傅東華先生から、作家協会の発起人内定者の名簿を受け取りました。そこには二十人の姓名が載っており、徐懋庸先生のご高名も含まれていたことをはっきり覚えています。傅東華先生が黄源にこの名簿を渡して、「交渉に行」かせた人間は、事実上一人しかいません。それが巴金です。というのも、私と黄源は長年の友人だからです。私はその時、最初の発起人五人のうちの一人にされていました。黄源は入っておらず、彼は徐懋庸とともに、「第二次」発起人にされていました。黄源は名簿を私に見せ、他の人の意見も伝えてくれました。私は、最初の発起人にはなりたくない、と答えました。なぜなら私はこれまでどんな団体にも加入したことが無く、作家協会を組織する意図がまだ分からなかったからです。これがすなわち私と「黄源が相談した結果」です⁽¹⁷⁾。

巴金のこの記述からは、巴金が「中国文芸工作者宣言」の起草にまったく関わっていないように読み取り得るが、後年に書かれた「懐念烈文（黎烈文を懐かしむ）」⁽¹⁸⁾には、「ある日の午後烈文と私は雑談をしていて、二人とも私たちも宣言を出した方がよいと考えた。彼は私に起草するように言い、私は彼から書き始めてくれと言った。翌日私たちは顔を合わせ、それぞれ草稿を出し、ひとしきり互いに譲り合い、烈文が二つの草稿を持って魯迅先生に会いに行った。彼は先生のところで二つをひとつに合わせ、先生に署名をお願いし、「中国文芸工作者宣言」という表題をつけた」とある。実際には巴金は「中国文芸工作者宣言」の起草に深く関わっていたようである。良友図書印刷公司1937年初版の「答一個北方青年朋友」で「宣言を起草したわけでもありません」としているのが、事実を隠しての表現なのかどうかは分からないが、文字通りに読めば、おそらく巴金は下書きを補助的な黒子の作業と見なしていたか、共同宣言文の本質として、一個人が文責を担うものとは考えていなかったのだろう⁽¹⁹⁾。

さて、巴金が「答一個北方青年朋友」から、どのような理由で徐懋庸に関する長い記述を削除していったのかはつまびらかでない。ただ、おおよそ、中国アナキズムをとりまく環境の変化、それに対する巴金のスタンスの移動、中華人民共和国建国がアナキズム評価

(17) 良友図書印刷公司1937年初版「答一個北方青年朋友」。

(18) 「懐念烈文」：香港『大公報』副刊「大公園」1980年5月31日～6月2日初出。『探索集』（香港三聯書店，1981年）所収。『巴金全集』第16巻所収。

に与えた影響，などをかいま見られよう。そして，一点確かなのは，当時巴金が徐懋庸に強く憤っていたことである。

巴金はその憤懣を，公開の返信という形式で表明した。ここから二つのことが考えられる。一つは，おそらく実際に，読者からこの件に関する来信があったろうことである。来信の多少は分からないが，文中に引用もあり，手紙の存在自体を虚構とは考えづらい。

もう一つは表現上の特色である。「答一個北方青年朋友」は，ある北方の青年に宛てた書簡体であり，徐懋庸を批判しながら，形式的には徐懋庸に向けられていない。徐懋庸との直接の論戦は拒否され，ある北方の青年に代表される読者一般を味方につけようとする方向に力点が置かれている。巴金は，徐懋庸に対して文字どおり「話にならない」憤りを感じていたに違いないし，またそもそも徐懋庸が「私信」を公開するという形式で巴金を攻撃してきたことに對抗する意識もあったろう。が，それだけでなく，複雑で世知辛い文壇状況のもと，読者に対して直接的に釈明，自己主張するという語り口に，有効性を見出していたとも解せよう。

巴金は，良友図書印刷公司1937年初版で，次のように述べている。

この「文壇」（失礼ながら今回はこの二文字を使わせていただきたい）で，この二種類の人（スペイン統一戦線の闘士と中国アナキストを指す：筆者注）のために口をきけるのは，私一人しかいないからだ。これは私にとって義務のようなものだ。出てきていくらか話さない訳にはゆかない。

1936年当時の巴金は，中国アナキズムが退潮しつつある中で，孤軍奮闘を自覚しながら，なればこそその責任感，使命感を抱いて発言していた。作家の道に進んだ巴金の，自らが発言してメディアを操作し，読者に真実を理解してもらわねばならない，という覚悟だったと読めよう。

4. 1930年代の作家と読者

巴金の「我和読者」は，1930年代当時の作家と読者の関係を考える上で興味深いエピソードを紹介している。

1936年の冬，巴金はある若い女性読者から手紙を受け取った。それによれば，この女性は継母と折り合いが悪く，恋人にも捨てられ，自殺を考えて家出した。幸い親戚に助けられて杭州西湖湖畔の寺に入ったのだが，実は和尚が彼女に下心を持っており，親戚もその和尚と共謀していたことが分かった。それで女性は巴金に助けを求めてきたのである。

巴金は，友人の作家魯彦（1902-1944，Lu Yan），靳以（1909-1959，Jin Yi）と連れだって，杭州までこの女性を訪ねた。二日にわたって女性の話に耳を傾け，女性の寺での滞在

(19) 「宣言を起草したわけでもありません。」の一文は、『中流』第1巻第3期にはなく，良友図書印刷公司1937年初版で加筆されており，巴金のこだわりも感じられる。魯迅も同様の線で「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」を書き換えており，前掲丸山昇「「答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題」手稿の周辺——魯迅の晩年と馮雪峰をめぐって——」がこの点に注目して，「「文芸工作者宣言」が巴金の発起になるとすることがまた無意味な紛糾を引き起こすのを避けるために，敢えて自分が前面に出たのだろう。」と指摘している。

費として80元あまりを和尚に支払い、上海まで列車の切符を用意し、上海にいる親類のもとへ女性を送りとどけたという。巴金は次のように述べている。

この件は、当時は全く当然のことと思われた。…中略…

上海に叔父さんがいるのなら、その女性は どうして叔父さんに助けを求めないで、わざわざ見ず知らずの人間に手助けを頼んだりしたのだらうと思う人があるかもしれない。はじめは自信満々で家を離れ、人が止めるのも聞かなかったので、親戚に自分が杭州で困っているとは知らせたくなかった、と彼女は言っていた。彼女を「意地っ張りだ、面子にこだわっている」、さらには「見栄っ張りだ」とも批判することは可能だが、長いあいだ旧社会で生きていれば、誰にでもそんな欠点はある。私たちの当時の解釈は、「読者が作家を信じたのだ」というもので、それで十分だった⁽²⁰⁾。

見ず知らずの人物が困っていると手紙を書いてきただけで、三人の作家が上海から杭州まで出向き、少なくないお金を費やして世話をしたという、にわかには信じがたいエピソードである。女性に手を差し伸べた巴金自身でさえ、半世紀近くを経てからは、不自然に思う人があるかもしれないと不安がって、説明を繰り返しているほどだ。このエピソードから、1930年代に読者が作家に対して抱いていた期待、また作家の側が持っていた使命感、読者に対する責任感などが窺い知れよう。

おわりに

以上、『随想録』所収の「把心交給読者」「我和読者」を参考にしながら、『短簡』を確認してきた。1930年代の巴金と読者の諸相を、ここでもう一度整理しよう。

巴金は革命に理想を求め家出を考える青少年から相談を受けていた。彼らは明らかに巴金の小説『家』等に影響されていた。巴金は自作のフィクション化された家出と読者の実際の家出行為とを区別し、「忍耐」を説いて実際的にアドバイスしていた。

巴金は徐懋庸から卑劣なアナキストと非難され、読者からもこの件を問い質されていたと考えられる。巴金はスペイン統一戦線と中国アナキズムに与する立場をはっきり示した。また、返信書簡という形式を用いることで、論戦相手ではなく読者に対して直接釈明し、説得に努めた。

巴金は一部の読者とは長い付き合いになったり、実際に親しい関係になることもあった。

特殊な例として、見ず知らずの読者から私的な助けを求められることがあった。巴金らは読者の作家に対する信頼と考え、信頼を裏切らないために、少なからぬ金額を投じて世話をした。

全体に通じる特徴として、巴金には読者と直接結びつき、コミュニケーションしようという志向のあることが指摘できよう。実際に生身の読者とかなり踏み込んで関わることもしばしばあった。巴金は自分の確固たる信念を貫いて読者と接しており、読者に迎合する傾向は認められない。その意味で双方向コミュニケーション的ではない。しかし巴金の姿

(20) 前掲「我和読者」。

勢は決して啓蒙者のそれでもない。プロフェッショナルの作家として、自らの信念に誇りを抱きつつ、読者との接触を大切にしていたということに尽きよう。巴金と読者のこの濃密な関係は、文革後に「把心交給読者」で「読者だけが発言権を持っている。」と、作家と読者の間に他者の介入を許さない姿勢を打ち出すことにつながってゆくと思われる。

巴金は30年代を回想して次のように述べている。

解放前、特に抗戦以前は、読者の来信にあるのはいつも国家、民族の前途と個人の苦悩、そしてその前途のために献身したいという願望と決心だった。彼らに具体的に答えられず、私はいつも苦痛を感じていた。私はただ、「古きは滅び、新しきが発展する」「旧社会はおだぶつになり、新社会が到来する」「光明が暗黒を駆逐する」と言って、彼らを励ますことしかできなかった。返信の中で、私は彼らに明確な路は示さなかった。しかし私は、自分のいくつかの小説とは違って、手紙では少なくとも方向性を示したし、それはあいまいな方向ではなかった。私は読者に対して、甘言を弄することなどできない⁽²¹⁾。

30年代の読者は、巴金への来信で、「いつも国家、民族の前途と個人の苦悩、そしてその前途のために献身したいという願望と決心」を語っていたという。この証言は、「30年代、40年代に創作の秘訣は何かと手紙で私に尋ねてくる人は少なかった。50年代からこの問いを持ち出す読者が多くなった。」⁽²²⁾ という発言とあわせて読むと、興味深い。

1930年代、巴金と読者は、国家、民族、個人の諸々を、同じ地平でともに悩みともに語り合える仲間だった。両者は天下国家を論じる主役であり、彼らの私的な事柄もまた尊厳と自由の中にあった。

【「答一個北方青年朋友」版本比較】

(1) 『巴金全集』第13卷 (P. 37下から3行目～P. 38 L. 4)

朋友，你們北方的青年可能對上海文藝界的情形不大了解。我自己並沒有參加最近的文藝論爭，但我得說一句公平話，這絕不是無謂的筆戰，更不能說是“內爭”。這論爭對於新文學的發展是有幫助的。有許多問題是要經過幾次的論戰後，才逐漸地明朗化而終於會得到解決的。倘使沒有一切過去的論爭，我們的新文學還能夠發展到目前的這個階段麼？然而我並不曾寫過關於這種論爭的文章……

下線部分，文化生活出版社1949年版，良友圖書印刷公司1937年初版，『中流』第1卷第3期（1936年10月）ではそれぞれ以下の通り。

・文化生活出版社1949年版

然而我的文章並不屬於這方面。你看見了我的所謂答徐懋庸的短文，但牠不是文藝論戰的文章。我從沒有寫過那一類的東西，因為已經有人寫出很好的來了。我和徐懋庸並無私人

(21) 前掲「把心交給讀者」。

(22) 同前。

的恩怨，我寫文章『答徐懋庸』不過是出來爲那在西班牙人民解放戰場上犧牲的英勇鬥士辯誣，這與徐懋庸所說的『罵街』不同。現在連徐懋庸自己也以爲他的話『實在籠統得無理』，而且『姑且承認巴金所說的情形是實』了，那麼我的目的就算達到了。我不想再寫文章來談這種事情。朋友，你看這是不是無謂的筆戰，這是不是內爭？朋友，你以爲闡明了事實的真相，說明了西班牙 C.N.T. 戰士的英勇就會使北方的青年『心更涼些』麼？……

· 良友圖書印刷公司1937年初版

然而我的文章並不屬於這方面。你看見了我的所謂答徐懋庸的短文，但牠不是文藝論戰的文章。我從沒有寫過那一類的東西，因爲已經有人寫出很好的來了。我和徐懋庸並無私人的恩怨，（我在那文章裏面說，有徐懋庸做理事，我不加入「文藝家協會」，這是指以後的事；並不是說我以前沒有加入「文協」是因爲徐懋庸加入了「文協」的緣故。）我寫文章「答徐懋庸」不過是出來爲那在西班牙人民解放戰場上犧牲的英勇鬥士辯誣，替那少數沉默地工作著的「中國安那其」伸冤，因爲在這「文壇」（讓我放肆地把這兩個字用一回）上肯出來替那兩種人說話的就只有我一個人。這在我似乎成了一個義務。我不能不出來說兩句話。這與徐懋庸所說的『罵街』不同。現在連徐懋庸自己也以爲他的話『實在籠統得無理』，而且『姑且承認巴金所說的情形是實』了，那麼我的目的就算達到了。我也不想再寫文章來談這種事情。朋友，你看這是不是無謂的筆戰，這是不是內爭？朋友，你以爲闡明了事實的真相，說明了西班牙 C.N.T. 戰士的英勇和中國安那其並不反動，就會使北方的青年『心更涼了些』麼？

但是，朋友，我現在又要告訴你一件使你的『心更涼』的事情了。也許你已經見到了徐懋庸說我「破壞」，「反對」文藝家協會的一段文章罷。在「還答魯迅先生」一文裏，徐懋庸說：

『原來「文藝家協會」的發起最初本有黃源在內的。我會親自聽他說，他從傅東華和沈起予那里接受了一張發起人的名單，上面有二三十個人的姓名，有許多要待他去接洽，不料隔不多時，不知爲了什麼手掌文協發起人的名單的他，忽而變成文協的積極的破壞者了。（後來我聽說這是他和巴金商議的結果，因此我對於巴金也有點莫名其妙。）』在「答巴金之答」裏，他又說：

『巴金的反對文藝家協會卻早在連黃源也作爲發起人的時候。那時候徐懋庸非但沒有當理事並且也不參與發起，那麼巴金的反對，到底爲了什麼理由呢？』

在這里徐懋庸說得那樣有把握，連我自己也幾乎要相信了他的話。朋友，你說不定會相信巴金真的是在「破壞」，「反對」文協罷。但是幸而我還能夠運用腦力把我從日本回來後一年來的言行仔細檢查一番，我才放了心，知道我並沒有做過一件「破壞」或「反對」文協的事。在這一點我的確比徐懋庸更知道我自己。

不錯，我沒有加入文協，我還在文藝工作者宣言上面簽了名。但不加入文協，並不見得就反對文協，一時不加入也並非就永久不加入文協；而所謂「文藝工作者」也並沒有組織過什麼新團體和文協對抗，我又不過是那許多簽名者中間的一個。宣言也不是由我起草的。難道我們真的連在一張宣言上簽名，表示自己對於救亡圖存的態度，這種最小限度的自由都被剝奪了麼？徐懋庸一口咬定我「反對」文協。不知道還有什麼證據？至於他『聽說這（指黃源反對文協）是他（黃源）和巴金商量的結果』，那更是「道聽途說」了。攻擊一個人，坐實一件罪名，似乎不能夠單讓「聽說」二字來負責。倘使這也可以，那麼我「聽說」的事情

便多了。

真實的事情是這樣的：黃源的確『從傅東華先生那里接受了』一張作家協會的內定的發起人名單，上面有二十個人的姓名，徐懋庸的大名也在內的，我記得很清楚。傅東華先生交這張名單給黃源要他「去接洽」的人，事實上只有一個，就是巴金，因為我和黃源是多年的朋友。我當時被派定為五個最初發起人中間的一個，黃源並不在內，他被派定和徐懋庸一起做「第二次」的發起人。黃源把名單給我看過，把別人的意思也轉達了。我回答他說：我不想做最初的發起人，因為我從沒有加入過任何團體，並且我還不知道組織作家協會的用意。*這就是我和『黃源商議的結果』了。

過了一些時候，另一個朋友拿了一張發起「作家協會」的宣言來要我簽名，我說我不願意做發起人。那朋友只笑了笑就拿走了。以後纔聽說「作家協會」改成了「文藝家協會」，不久又有一個朋友介紹我加入，還交了一些單據給我，我當面對他說我暫時不想加入。事實上我對每次的「請」和「徵求」都有口頭上的回答的。徐懋庸說我「置之不理」，那又是「造謠」了。……

朋友，我聽從你的勸告，以後不再寫這一類的文章了。但這一次你應該給我說話的權利。我也應該借這個機會來表明我的態度，我說明了我和文協的一點關係，我同時還表示我從來就沒有反對過文協，便在今天我也沒有反對牠的心思。我以為暫時不加入文協的人不見得就對文協懷著惡意。文協似乎應該用工作成績來說服他們，使他們也心悅誠服地來加入，這才是文協的事業。倘使不這樣做，卻儘管讓牠的理事出來發私信，寫文章，說這個「詐」，罵那個「詔」，又根據一點不實的消息，胡亂地把「破壞文協」或「反對文協」的罪名加到每個不會加入文協的人的頭上，那麼除了使一些文藝工作者望之卻步外，還能夠有什麼作用呢？

·『中流』第1卷第3期（1936年10月）

良友図書印刷公司1937年初版との主な相違点のみ列挙する。

i. 上の良友図書印刷公司1937年版引用文中にある二重傍線部「宣言也不是由我起草的。」は存在しない。

ii. 良友図書印刷公司1937年版引用文*部分は、以下の一段。

黃源也對我說，他自己年青，不會應付事情，以致譯文被迫中途停刊，他怕做了作家協會的發起人，反會妨害作家協會的進行，所以也沒有答應加入。我聽了這話，也就沒有說什麼話。

iii. 良友図書印刷公司1937年版引用文……部分は、以下の一段。

朋友，你看，徐懋庸不但在「私信」裏「籠統得無理」地「信口雌黃了一通」（他自己承認的，）而且在公開的文章裏「含血噴人」了。朋友，你說，在他寫了那樣的私信發表了那樣的文章以後，我還不應該出來把真相闡明一番麼？

(2) 『巴金全集』第13卷（P. 38 L. 5～P. 38 L. 9）

朋友，现在已是三点一刻了，外面靜寂得如在一座古城。兵车的声音也听不见了。明天的事情怎样，我不能知道。然而你对于甚至在这种时候还拿起笔给你写信的我将怎样地说话呢？你还忍心责备我在嚼舌头么？但是，朋友，请原谅我，我绝不想做一件使你们忧愁，使你们心凉的事情。*

朋友，我要结束这封短信了。我手边一个抽屉里还有那么高的一叠信件。（后略：引用者）

下線部分，文化生活出版社1949年版，良友圖書印刷公司1937年初版，『中流』第1卷第3期はいずれも「還來寫這樣文章的我」。

*部分，文化生活出版社1949年版，良友圖書印刷公司1937年初版はいずれも以下の通りで，この一段をもって本文が終了している。

我告訴你，連這類的文章我以後也不想寫了。我預備從此低下頭來沈默地做我的文藝工作。不過我怕那做理事的又會拿什麼莫須有的罪名來加到我的頭上的。好罷，就讓他繼續地找尋種種口實來進行內爭罷。我預祝他的勝利！

*部分，『中流』第1卷第3期は，上記に続けて一行空き，以下の一段をもって本文が終了している。

朋友，我寫了上面的話以後不到一個星期，一個南方的友人來看我，他告訴我有人寫了『正告』我的文章，說我『自貶人格』『造謠誣陷』了某某人。朋友，你看這又是誰在嚼舌頭了。我這人的言行素來是光明磊落的。像寫「私信」背後攻擊人的事，我就從沒有做過。我的言論自有我署名的文章來負責，用不著一些冒充我的朋友的人替我發表談話。像這種『調發離間』『造謠誣陷』的手段，自是某一些人的慣技，但在這種時候我卻沒功夫來管這些事情了。某一些人爲我捏造了「談話」和消息；另一些人又根據這「談話」和消息來「信口雌黃」了一通，朋友，你看，這種「自貶人格」的舉動，是你們北方的青年所能夠了解的麼？那麼，請你原諒我這次的饒舌。

なお，文意に影響しない細かい字句の異同は取りあげなかった。また良友圖書印刷公司1937年初版，『中流』第1卷第3期で固有名詞に付されている傍線は記さなかった。引用文中の傍線，*印は，便宜上筆者が付したものである。

〔抄 録〕

本稿は、「巴金と読者」というテーマのもと、巴金の読者観の初歩的な確認を行ったものである。巴金が1930年代なかばに読者との間で交わした書簡を編纂した、公開書簡集『短簡』（良友図書印刷公司、1937年）と、全5巻の随筆集『随想録』（香港三聯書店、1979年～1986年）に含まれ、読者に言及している二篇の文章「把心交給読者（読者に心を捧げる）」「我和読者（私と読者）」を題材にしている。

小論ではまず、1930年代半ばの文壇と読者の有り様を示す一事例として、これらの書籍、文章に描かれている巴金と読者の交流をスケッチした。さらに、巴金の文章から窺える読者の実際の姿を抽出して、1930年代の読者像の一端を示した。

全体に通じる特徴として、巴金には読者と直接結びつき、コミュニケーションしようという志向のあることを指摘した。巴金の姿勢は双方向コミュニケーション的ではないが、啓蒙者のそれでもなく、プロフェッショナルの作家として、自らの信念に誇りを抱きつつ、読者との接触を大切にしていたことを明らかにした。